

ひょうごの遺跡

兵庫県埋蔵
文化財情報

44
号

平成14年6月10日発行

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032

神戸市兵庫区荒田町 2-1-5

TEL 078 (531) 7011/FAX 078 (531) 7014

ホームページアドレス

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~maibun-bo/>

板

但馬古代木簡特集



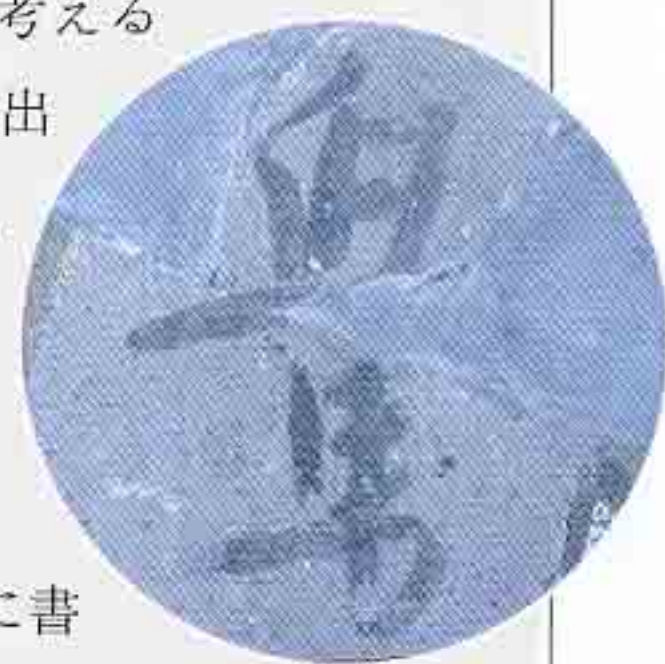
に記された 古代の但馬

最近の但馬地方での発掘調査によって、新しい文字資料が数多く発見されました。文字が書かれた資料には、モノからだけではわかりにくい昔の社会のしくみなど多くの情報が含まれ、歴史を考える上で大変重要な資料となっています。特に遺跡から出土する文字資料については、伝記、伝説であったり、

時代に脚色されたものを書きとめたものではなく、当時の役所で実際に使用されていた文書なので、第一級の資料であるといえます。

文字は土器に書かれることもありますが、木に書かれたものも多く、それらは「木簡」(もっかん)とよばれています。特に古代において紙は貴重なものである上、土の中では腐りやすく、現代まで残りにくいため、木簡は文字資料の代表的なものとして位置づけられています。

本号では、近年増加した但馬の木簡資料を紹介し、古代但馬のようすを覗いてみることにします。



(上の遺物3点は県指定考古資料)



古代但馬の中心地

日本海

1. 但馬国府・国分寺
(城崎郡日高町松岡・国分寺)

気多郡

出石郡

2. 袴狭遺跡
(出石郡出石町袴狭)

養父郡

朝来郡

3. 加都遺跡
(朝来郡和田山町加都)

兵庫県但馬地方

掲載遺跡の位置と旧郡名

但馬国府・国分寺

古代の但馬で中心地といえる場所があります。それは但馬国の国役所（**国府**：こくふ）、**国分寺**とその周辺です。これまでの発掘調査によって、日高町祢布ヶ森（にょうがもり）遺跡、深田遺跡が国府に関連する遺跡と考えられるようになりました。

但馬国分寺の調査では、塔、金堂、僧坊などの伽藍配置が確認されています。

祢布ヶ森遺跡では、門と考えられる1間×2間の掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）と塀が見つかり、それと平行して2間×9間以上の南北方向の掘立柱建物が見つかりました。ほかに庇（ひさし）をもつ掘立柱建物も見つかり、これらは**国府に関連する建物**と考えられています。出土遺物には木簡のほか、磁器の白磁（はくじ）、青磁（せいじ）、三彩（さんさい）、緑釉（りょくゆう）陶器、灰釉（かいゆう）陶器などがあり、当時の役人が使ったと思われる珍しい遺物が含まれています。

深田遺跡では井戸や柱が見つかりましたが、国府の中心施設は見つかりません。しかし、凹地からは公文書である巻物の軸（**題籤**：だいせん）などの木簡のほか、木履（きぐつ）、木製祭祀具、墨書土器、緑釉陶器、灰釉陶器、帯金具、銅銭が出土しています。特に、墨書土器には「但馬」（表紙参照）とか「国當」（右頁参照）と書かれたものがあり、遺跡周辺が但馬国の役所、国府に関係すると考える証拠になっています。



但馬国府とその周辺



祢布ヶ森遺跡
(日高町教育委員会提供)

木簡について

深田遺跡出土の題籤には「官稲」「田租」「佐須郷田率」「租未進」「造寺米残」など、**税の徴収と田の管理**に関するものがあります。そこには「大同五年」（810年）、「弘仁三年」（812年）、「弘仁四年」（813年）といった年号が記されていました。

「**造寺米残**」と書かれた木簡からは、遺跡と周辺の国分寺・国分尼寺などとの関係がうかがえます。遺跡の南西600mには但馬国分寺、北西500mには但馬国分尼寺があり、周辺は互いに関連した但馬国の中心地であったことがあきらかとなっています。



県指定考古資料
墨書土器「国當」

残された問題

これらの遺跡は古代の気多郡高田郷にあたり、現在の城崎郡日高町に但馬国府があったことがあきらかとなりました。それは『日本後紀』に国府を延暦23年（804年）「気多郡高田郷に遷す」と書かれているのとはよく合っています。

しかし、それと同時に国府が遷される以前はどこにあったのか、という問題が残されたままとなりました。これを解決するには、出石郡出石町にある袴狭遺跡の調査成果と出土木簡の解釈を待たなければなりません。



県指定考古資料
寺との関係を示す木簡

まぼろしの第1次国府か？

はかぎ
袴狭遺跡



鐫符木簡 (T21号木簡)

『日本後紀』(840年成立)には、延暦23年(804年)に但馬国の役所である国府を「気多郡高田郷に遷す」と書かれています。では、遷される前(第1次但馬国府)はどこにあったのでしょうか。その答えは長い間謎で、まさに、まぼろしのままとなっていました。

ところが、出石郡出石町にある袴狭遺跡から出土した木簡の文字を解読した結果、この移転前の但馬国府が袴狭遺跡周辺にあったと考えられる可能性がでてきました。

袴狭遺跡からは76点もの木簡が出土していて、地方の一遺跡から出土する量としてはずば抜けて多いのです。

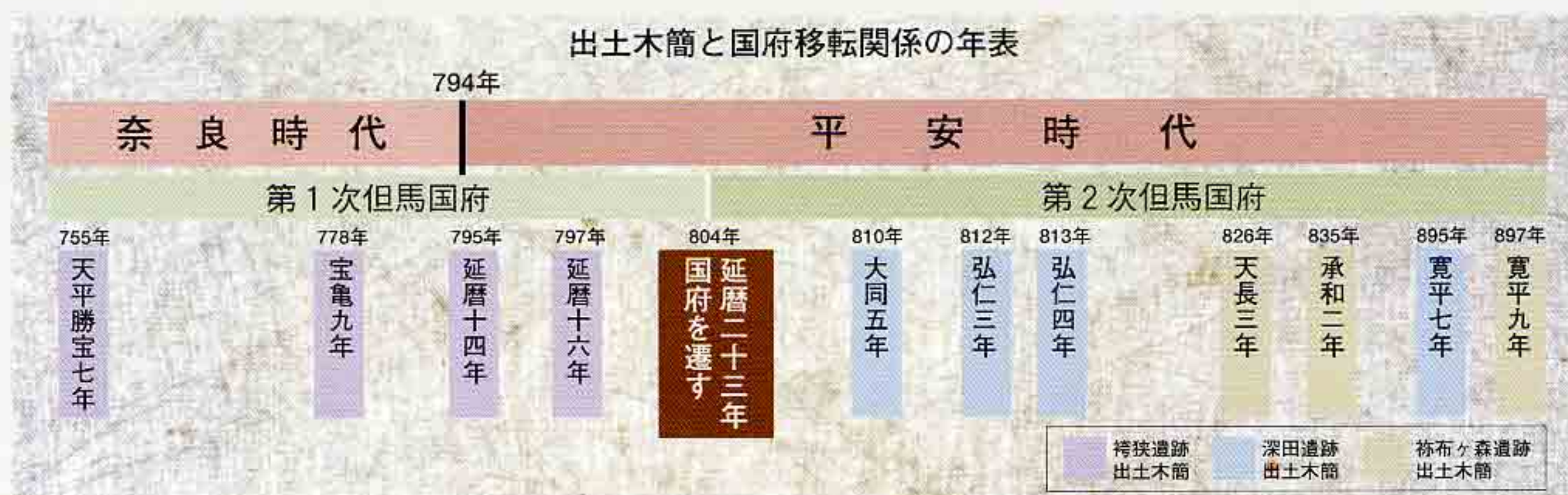
特徴としては奈良時代から中世までの長い期間にわたる木簡が出土しているということが挙げられます。また、木簡が使用された具体的な場所が明らかになることも、他の遺跡にはない特徴の一つです。

これまでに、袴狭遺跡からは木簡、祭祀具などの多くの木製品や、帯飾り、緑釉陶器などの遺物と共に、掘立柱建物が多数みつかっています。これらの中にはまぼろしの第1次但馬国府に関する建物が含まれているのかも知れません。

木簡について

では、袴狭遺跡がまぼろしの第1次但馬国府と考えられるようになったのはどのような木簡からでしょうか。まず、木簡に記された内容が国の役所である国府でしか出土しないようなものであるかどうか問題となります。

T21号木簡(左上)とよんでいる木簡の表面には『論語』が習書(しゅうしょ)されています。『論語』の木簡は役人の手習いとして平城京をはじめとする古代の役所から出土することが多く、このころ袴狭遺跡にも役人がいたことを示しています。





裏面には国府が管理する**鑿符**（けんぷ）という課役の免除を認める符に関する内容があり、この木簡が国府の事務に伴って作られたものと考えられます。

また、**米の荷札木簡**（右上）には**養父郡**の地名が書かれていて、袴狭遺跡が位置する出石郡とは異なる地名がみられます。このことは袴狭遺跡には複数の郡を管理する施設、すなわち国府があったことを示している可能性が考えられます。

次に、『日本後紀』にあるように、国府が遷された年代である延暦23年（804年）以前の年代が記された木簡が出土していることが条件となります。

袴狭遺跡で出土した木簡のうち、最も古い年代が記されたものは天平勝宝7年（755年）のもので、**国府移転以前の年代**です。その他に国府移転以前のものとして、宝亀9年（778年）、延暦14年（795年）、延暦16年（797年）があり、合計4点が出土しています。これらの木簡によって、国府移転以前の袴狭遺跡に文書を使用するような役所が存在していたことが明らかになりました。

なお、国府移転以降の年代を記した木簡も出土していますが、内容からは国ではなく、**郡の役所**であった可能性が考えられ、国府移転以降も袴狭遺跡は重要な役割を担っていたようです。

このように、袴狭遺跡には**国府移転以前の時期**に木簡があり、**国府にしかみられない内容の木簡**が出土していることから、これまでまぼろしであった但馬国第1次国府の有力な候補の一つとなりました。

古代の足音が聞こえる

加都遺跡



古代の人が通った道

刀自女

歳

置

諷

大家部酒刀自女 阿刀部嶋公 鷹

藤

家

勝

郡

(赤外線写真)

左の木簡は朝来郡和田山町の加都遺跡で見つかったもので、古代の水田跡から出土しました。棒状に加工されたもので、長さは120cm以上もある大変長いものです。上端は欠けていますが、下端は杭のように先端を尖らせています。

文字は横線で区画された中に、**大家部酒刀自女**や**阿刀部嶋公**といった古代の人の名前が書かれていて、その下には同じ筆跡で「鷹」「藤」「家」「勝」「郡」「置」「諷」などの文字がそれぞれ複数書かれています。どのような目的で書かれ、どのように使われたのか、よくわかっていません。

また、**右下の木簡**も出土しました。「山口里俵参上数十一石今」と書かれています。山口里とは、現在の朝来郡朝来町山口にあった村であると考えられています。

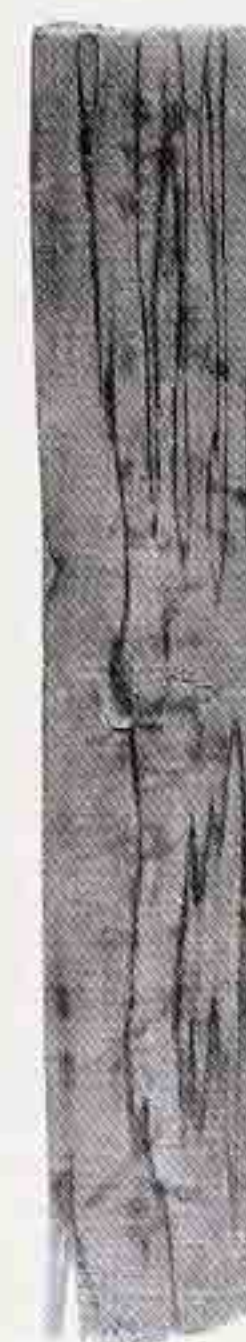
加都遺跡では役所などの建物は見つかっていませんが、奈良時代後半から平安時代の道路が見つかっています。

道路は一直線に延びていて、総長約350mにわたって見つかりました。幅は広いところで約6mあります。この道路は遺跡の南側と北側にある約2km離れた山裾を結んだ直線と重なっていて、道路は山裾間を最短距離で結んでいるようです。この特徴はこれまで見つかった古代の官道によく認められるものです。

また、この道路は地形の低い場所では盛土をし、のり面や路面には石が敷かれ、地形の高い場所では両側に溝が掘ってありました。

道の方向から但馬（山陰道）と播磨（山陽道）を結んだ道と考えられ、今のところ「**但馬道**」と呼ぶことにしています。

右の木簡にあるように、いろいろなものが運ばれたり、木簡をもった古代の役人がこの道を行き来したことでしょう。



山口里 俵 参 上 数 十 一 石 今

道を通った木簡？

その四 木簡のいろいろ



木簡は、文字が書かれた木のことで、その内容によっていろいろと分けることができます。まず第一に役所が職務に従って書いた行政文書がありますが、他にも荷物に付けられた荷札（にふだ）木簡、まじないを書いた呪符（じゅふ）木簡、字の練習をした習書木簡、商業活動に関係した木簡など、いろんな目的のために文字が書かれています。

ここでは、ちょっと変わった木簡を紹介します。



上司を呼びつけ？ 香住エノ田遺跡

豊岡市香住に所在する香住エノ田遺跡から出土した木簡には、**部下が上司を呼び出す**という、珍しい内容が書かれています。

木簡は、「召史生・・・主帳少□」と書いてあり、出石郡の役人（主帳・少領）が、但馬国の役人（史生）を呼び出そう（召）とした内容です。

香住エノ田遺跡は奈良時代の建物や墓が見つっていますが、なぜ、出石の郡役所ではない場所から出土したのか、さらに**但馬国の役所と出石郡の役所との関係**はどうだったのか、などの疑問が残ります。今後の調査、研究が注目されます。



木製品の出土状況 一香住エノ田遺跡一
（豊岡市教育委員会提供）



効果千倍！！ 古代のまじない 袴狭遺跡

袴狭遺跡とその周辺の遺跡からは「祓え（はらえ）」に関する木製品が**1万点**近くも見つかりました。その代表的なものは人形（ひとがた）・馬形・舟形などの形代（かたしろ）と呼ばれるものです。

形代は、けがれや病気などの身体の災いを取り除くために使われたもので、災いを人形に移し、馬形や舟形などとともに川や溝などに**祓い流**して使いました。このような形代は全国的に出土しており、ほとんどが役所と考えられる遺跡の近くで見つかっています。

普通の人形は20cm程度ですが、右の人形は1m以上もある大きなものです。お腹のところには「一人當（当）千 急々如律令」と書かれてあり、この人形一体で**千体分の効力**を期待していたことがうかがえます。

なお、「急々如律令」はまじないの速効性を願う決まり文句です。



まじないの木簡
一袴狭遺跡一



「わたしたちのまち但馬」

—木簡から見た古代の但馬—

1. 日時 平成**14**年**7**月**7**日(日) **9:00~16:00**
2. 場所 兵庫縣城崎郡日高町祢布954-6 **日高町文化体育館大ホール**
3. 主催 「わたしたちのまち但馬 —木簡から見た古代の但馬—」シンポジウム実行委員会
4. 共催 木簡学会、兵庫縣教育委員會埋藏文化財調査事務所
出石町教育委員會、日高町教育委員會
5. 後援 豊岡市教育委員會、朝来郡広域行政事務組合、
朝来町教育委員會、養父郡広域事務組合、
竹野町教育委員會、
但馬考古学研究会、神戸新聞社
6. 内容 **大平 茂** (兵庫縣教育委員會埋藏文化財調査事務所)
「但馬国の古代遺跡と但馬国府」
木下 良 (古代交通研究会会長)
「但馬国の交通と山陰道」
西口 圭介 (兵庫縣教育委員會埋藏文化財調査事務所)
「柴遺跡と出土木簡」
鎌田 元一 (京都大学)
「木簡からみた但馬国府」
佐竹 昭 (広島大学)
「但馬国分寺木簡をめぐる諸問題」—安芸国分寺木簡との対比から—
討 論
7. 申し込み方法
実行委員会事務局まで電話、FAX、郵便でお申し込み下さい
8. 事務局 〒669-5391
兵庫縣城崎郡日高町祢布920
日高町教育委員會 社会教育課 気付
「わたしたちのまち但馬 —木簡から見た古代の但馬—」シンポジウム実行委員会
Tel. 0796-42-1111 Fax. 0796-42-2024
9. その他 **参加費無料**、ただし資料をお求めの方は500円が必要です。(写真は会場の日高町文化体育館)



お詫びと訂正

ひょうごの遺跡43号におきまして、誤りがありました。表紙の写真左の飛禽鏡が上下逆です。また、2頁目の上から2つめの写真は「第1主体部」「第2主体部」が反対です。訂正してお詫びを申し上げます。



「こころ豊かな兵庫」をめざして



編集後記

現代の役所に勤めながら、古代の役人の書いた文字を使って歴史を組み立てる…。何とも不思議に感じながら、編集に努めました。普段、考古学は文字を扱わないので、資料を十分に生かしきれていないかと思いますが、及ばないところは上記のシンポジウムで補って頂けると幸いです。(H. N)